

歴史

歩・歩・歩  
さんぽ

ふる里のむかし

あじろ



和白「二の関」から望む立花山

---

## 東区和白地区 歴史ガイドマップ

---

和白地区ガイドマップ・2021年2月 さんぽ会《和白グループ》

# 東区和白の概要

## ■和White地名の起こり

糟屋郡出身の言語学者、中島利一郎氏は『神功皇后御軍議地としての和White』と題してレポートを発表しましたが、その中で『日本議会最初の発源地は、筑前和Whiteであると言ったならば、人は定めて驚くであろう。しかし東洋言語学的に和Whiteという言葉は議会という意味なのであります。そして筑前和Whiteは神功皇后三韓征伐の御軍議場としてその機能を発揮したのである。・・・中略・・・そして神功皇后の和Whiteに於ける国家的議事の如きは、日本最初のものであったと言って良いと思う』。とあります。

「和White」の地名は、豪族たちが集まって熊襲征伐や三韓出兵の大軍議をした事から起こり、いつしか地名として定着したものと考えられます。

## ■旧和White町の位置

和White町地域の沿革をたどってみますと、藩政（江戸）時代（1600～1867年）から明治元（1868）年を経て、明治22年までは、記載図上でもわかるように上White村、下White村、塩浜村、三苦村、奈多村と5つの村がありました。



明治22（1889）年4月「市町村令」という法律が施行されるに当たり、5つの村が合併して、和White村が誕生しました。

その後、65年を経て、昭和29（1954）年11月1日に糟屋

郡和White町となり、さらに6年後の昭和35（1960）年8月26日に福岡市と合併したことにより和White町の名称がなくなり、現在の福岡市東区和Whiteとなりました。

## 和White塩田の歴史

福岡では古くから製塩が盛んでした。海の中道遺跡からは、8世紀から9世紀にかけて製塩土器（玄海灘式製塩土器）が出土しています。

奈多・和White海岸地区を塩浜地区と呼び、『福岡県地理全誌』には「相の浦の西、出崎の遠干潟なり。里民は勝浦崎と呼べり、一説にこの海岸をすべて桂潟と言う」と記録されています。この桂潟が塩浜の原形となっています。景勝地桂潟が人工の堤防によって次第に陸地化し、今日の塩浜集落が

形成されました。

### 《元禄堤防（沖の土堤）》

元禄16（1703）年 元禄堤防

奈多、和White海岸に塩田が開かれました。広さは約30町歩（福岡ドームの4.3倍）4代藩主黒田綱政の命により大野忠右衛門貞勝に造らせた堤防。

文化2（1805）年 大暴風雨

沖の土堤数カ所が大破損、博多湾の海水が浸入。三苦付近まで一面海と化しました。

嘉永2(1849)年 **大水害**

奈多～下和白を結ぶ沖の土堤も決壊。

嘉永3(1850)年 **大暴風**

この年も大暴風が起こる。沖の土堤は非常に大きな被害を受けました。

「沖の土堤の補強では長持ちしない、この沖にもう一つ新しい堤防を構築する外にはない」との結論に達しました。

## 《新開堤防の着工と完成》

嘉永6(1853)年

当時藩財政は窮乏しており、黒田藩土松本平内は当時博多三豪商の博多古小路で茶卸問屋を手広く営んでいた豪商七代目大山忠平、浜小路の石橋七蔵(烏羽屋、酒醸造業)と管内町の藤崎貞次(菊野屋、醤油醸造業)の資金協力を得て、新開築堤工事に着手しました。

安政3(1856)年

第1期工事完了 800間(1440m)

安政5(1858)年

第2期工事完了 550間(990m)

1350間、2430mの新開築堤大工事が完了。築堤内の一大整地が行われ、水路を特設した新しい塩田「一の開」、「二の開」ができました。

慶応2(1866)年頃

製塩は藩営となり、「二の開は塩付きが悪いため廃止して畑作に転換し、「一の開」に製塩の主力を注ぎました。この塩田の塩は、きめ細かく上質の塩で「和白塩」と呼ばれて藩財政に多大な貢献をしました。

## 堤防の安全を祭る「波切不動尊」

干拓より塩田を拡張して8年が経過、製塩も軌道に乗り「一の開」に製塩の主力を注ぎ、そこで地元の人々の手で「一の開」

の堤防上に「波切不動尊」を祀って堤防の安全を祈願しました。

明治13(1880)年頃

## 交通の要所「かねんて波止場」

当時、博多との往来は陸上交通が非常に不便で、そのため博多行きはほとんど小舟を利用していました。その小舟の溜まり場が水路を特設した「一の開」「二の開」の通称「かねんて」、今の五丁川が博多湾に流入する付近でした。

明治42(1909)年

塩専売制となりました。

明治43(1910)年

和白の製塩業が廃止されました。

## 新開築堤祈念碑

和白の製塩終了から49年後の昭和34

(1959)年11月25日に除幕式が挙行され、来賓として九世の大山忠平の三男石田多津夫氏、大山家の親戚代表として、前代藩士石井徳久氏、関係者代表博多にわか平田汲月氏等が列席され、序幕は九世の孫娘(当時4歳)に引かれ、碑文の見事な出来栄が現れ、盛会でした。

碑文は、末信源蔵氏が撰し、香椎高校の小森清美先生が揮毫されたものです。

\*\*\*\*\*

築堤の功績を称え、町発展の礎として全町民の感謝をこめて和白町が建立。

# 三苦地区

わだつみじんじゃ

## ①綿津見神社

所在地：三苦6丁目21-19

海岸近くに鎮座

祭神：志賀三神（綿津見三神）、豊玉姫命  
由緒：神功皇后が征西のおり、対馬沖で大風波に遭遇、船上から苦3枚を海中に投げ入れ「この苦が流れ着いた所に社を建てお祭りする」とお祈りをささげられたところ、たちどころに大風波がおさまり、無事に目的を終え帰還されました。その時の苦3枚（三苦地名の由来）をご神体としてお祭りされています。



往古は『八大龍王社』と称し、石の額と石灯籠に面影を残しています。明治元(1868)年明治政府の「神仏分離令」の際『綿津見神社』と改められ、航海安全、漁業と農業の神社として信仰されています。

綿津見神社仏像群：

福岡市指定有形文化財・彫刻

指定3軀：①木造不動明王立像②木造吉祥天立像③木造如来形立像（伝大日如来像）

附 2軀：④木造伝虚空蔵菩薩立像  
⑤木造伝薬師如来坐像



このうち如来形立像（伝大日如来像）が拜殿脇正面右の大日堂に、残りの4軀は左の虚空蔵堂に安置されています。如来形立像と菩薩立像は11世紀あるいは14世紀に海中から引き上げられたと伝えられています。製作時期は、伝薬師如来坐像が南北朝時代(1333～1392)年、残り4軀は平安時代(794～1192)年後期と考えられます。虚空蔵菩薩は延暦24(805)年伝教大師最澄の作とされ、かなり老朽化しています。この仏像群は玄界灘沿岸の古代・中世の宗教文化を物語る重要なもので、また廃仏毀釈の破壊を免れて残った貴重な文化財です。

こくんぞさん祭り：

虚空蔵堂内中央の虚空蔵菩薩は、知恵の神。三苦では財宝の神として「縁日(1月13日)に菩薩から小銭を借りると一年間は小遣いに不自由しない」という数百年来の信仰があります。小銭を借りた参拝客は1年後、感謝の意で借りた金額の倍額を返しに訪れます。

## ■綿津見神社保存の狛犬

所在地：綿津見神社

(像高)

阿形＝29.7ㇺ

吽形＝30.0ㇺ



うん  
畔形の頭部の角の跡があることから本来は獅子・狛犬の一对として作られたものと思われます。やや大げさに見える表情や体躯のプロポーションは室町時代の狛犬にはしばしば見られる特徴ですが、誇張された表現は像の小ささとともに逆に愛らしさを感じさせます。材質はクスで、全身を1本の木から彫り出しています。

## ②稲荷社（森の屋敷）



**所在地**：三苦7丁目綿津見神社の飛び地  
「森の屋敷」

8世紀、香椎廟神官として都から下った和氣重春（大中臣）は与えられた三苦郷に居を構え、姓を「三苦」と改め代々三苦郷を領有し、香椎宮4党の一つとなりました。ここを「森の屋敷」と呼んでおり、「三苦家」代々の屋敷跡と想像されます。

**七 橋**：筑前国風土記に「三苦に、夕尺の橋をはじめ七つの石橋があって、・・・」と記されている。区画整理事業に伴う道路工事で「森の屋敷」境内地に移されました。

## ③文殊菩薩

**所在地**：三苦6丁目20

学問の神様、通称「お文殊さま」。毎年3回のお祭りは、子供たちが集まってお文殊様周りの清掃や、ご馳走を作って遊ぶ何より楽しい行事でした。

## ■鳴き砂の浜と赤岩

綿津見神社から海辺に降りると、右側は新宮漁港まで自然の奇岩が見られ、左側は奈多漁港まで白砂青松の浜が続きます。ここでは、歩くと「キュッキュツ」と心地よい音がする鳴き砂の浜でもあります。中ほどにある赤岩（平岩）は昔は大きな岩でしたが現在では浸食され消滅しつつあります。



## ④青面金剛碑と庵縛日羅夜叉吽碑

**所在地**：三苦6丁目19

享保2(1717)年の刻書。(うんば-)は青面金剛に祈る「ご神言」

## ⑤三苦大師堂

【般若寺（ほんにようじ）跡】

**所在地**：三苦6丁目16

**本 尊**：弘法大師

**由 緒**：延暦24(805)年、伝教大師最澄が中国からの帰途、立花山の樟で仏像3体を刻み、般若寺を建てて納めたと言いつたされていますが、その後荒廃しました。その跡地と思われる所に、享保5(1720)年頃建立と伝えられる太子堂があります。

粕屋北部新四国千人参り、番外札所。

## ⑥三苦観音堂

**所在地**：三苦6丁目7

**本 尊**：観世音菩薩、準胝観音、不動明王。脇の地藏堂に地藏尊2体。粕屋北部新四国千人参り、第81番霊場。1870年頃建立。

# 三苦地区



## ⑦正覚坊石碑

**所在地**：三苦6丁目4

寛文9(1669)年の刻書。

修行途上病死した宝満山の修行僧の墓碑と伝えられています。



## ⑧託乗寺

**所在地**：三苦4丁目3-23

**宗派**：真宗大谷派

**由緒**：青柳の天台宗良泉寺の住職「唯念」は、教如上人の許で数年間修行に励み「本尊阿弥陀如来」2体をいただいて帰国し、宗派を真宗に、寺号も「託乗寺」と改め開祖「彬珈」に譲った。正保3(1646)年、三苦に移り、名だけの般若寺を再興、轡納山託乗寺開山。

**轡水**：託乗寺の中庭にある。

神功皇后征韓の帰途、飲水を求めると、皇后の馬が轡を咬みきり駆けだして、前足で盛んにけた所から清水が湧き出しました。依って地名を轡崎、井戸を轡水、轡を埋めた裏山を轡納山と呼ぶようになったといわれています。



# 上和白地区

## ①龍華山 明覚寺

**所在地**：和白東1丁目36-6

**宗派**：浄土真宗本願寺派

**由緒**：天正16(1588)年、立花城主立花宗茂公が柳川に移封されると、家臣の小金丸主税乃丞虎政は、請うて下野(農人)しました。その子久左衛門(宗白)は、当時立花(りゅうげ)にあった一草堂を再興し自ら開基となりました。正保4(1647)年、寺号、木仏を許され、立花に因んで龍華山明覚寺と称し、本堂・納骨堂は平成17年に建替えられました。

## ②白川恵比寿神社 と白川稲荷神社

**所在地**：上和白 小高い丘の上

**祭神**：恵比寿様、お稲荷様

**由緒**：寛文7(1667)年、禁制の貿易が発覚して一族郎党ことごとく処刑された博多の豪商、伊藤小左衛門ゆかりの御手洗家当主が後年、小左衛門の霊を静かにお祭りしたいと、博多の中浜口町(現下呉服町)から恵比寿様と共にここに移って来ました。

### 境内社

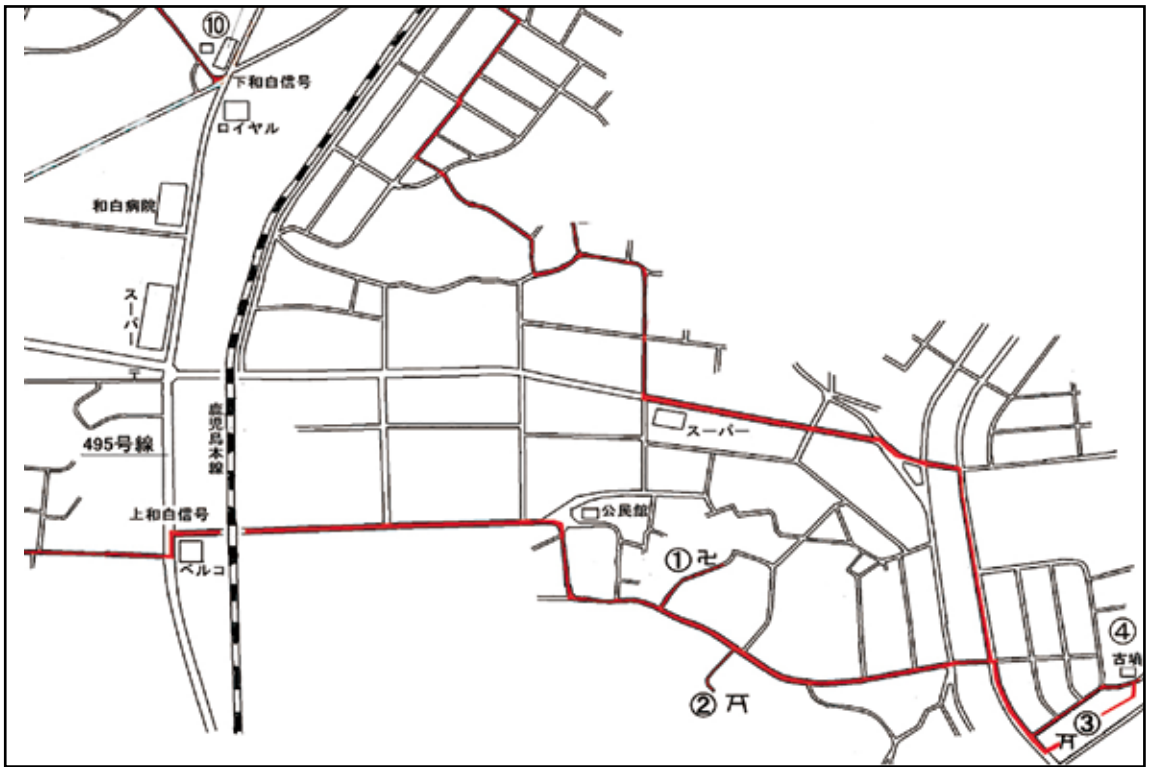
昇り竜像下の洞窟内に不動尊、地藏尊

## ③大神神社

**所在地**：高美台2丁目24-1

**祭神**：大物主神(おおものぬしのかみ、大国主命・大黒様)出雲大社と並ぶ大神神

# 上和白地区(上)



# 下和白地区(下)







社(大和の国一の宮)の分社で、貴船神社、荒神両者は末社。

**由緒**：『おおみわ』と呼ぶのは大和の大神神社が三輪山を御神体としていることによります。「神功皇后出兵の節、大和の将兵この地に駐屯の折、勧請したものといわれています。立花城主は守護神として特に崇敬厚かったといわれています。

**社殿**：昭和39(1964)年、拝殿東側に埋立工事を施工し鉄筋コンクリート流れ造瓦葺神殿、中殿、渡殿、内陣、その他施設祭具等氏子崇敬者の寄進により殆ど完備。

**貴船神社(貴布称)**：貴船神社の再建は早く、古くから「藤の森」「西の宮」と称され、同境内の自然石の庚申尊天(享和3年)、手洗鉢には宝暦2(1752)年の銘の外、文政元(1818)年、貴布称宮御神殿再建(大工)三橋利右衛門、安政5(1858)年の棟札(高さ95cm、幅20cm)木版の裏面には、御祭神の御威徳記載。

大正14(1925)年、大神神社境内に移されました。

**石像物**：庚申塔、大黒像、神馬、寝牛、記念碑多数

**みわ杉**：昭和49(1974)年、奈良の大神神社の杉が3本移植され、うち1本が残っています。

## ④宮前古墳群

**所在地**：高美台2丁目

大神神社境内から北の公園内分布の3基の円墳群。

**由緒**：昭和45年、団地造成の際調査され、4群9基の古墳群が確認されたが、現存するのはこの古墳群だけで6世紀末頃作られたとされています。

1号墳は神社拝殿西横、横穴式石室の玄室が残り、出土品から武人の墓と想像され、馬具、直刀、黒曜石の矢じり、金環、土器、ガラス玉等38個が発見されました。

2号墳はその北で、埋め戻されています。

3号墳は公園緑地、墳丘径10m(現地表示)～20m、内部主体は全長7.3mの横穴のよい墳丘と石室がそのまま残されています。

被葬者は有力な農民層と思われ、須恵器やガラス玉、土師器などが出土しています。

## ⑤和白高等小学校跡記念碑

**所在地**：和白3丁目交差点

明治33(1900)年、和白高等小学校は青柳高等小学校の分校として発足しました。

その当時の校区は和白、立花、原上三代、下府、湊、新宮で当初は上和白の「大名」オオナ地内に設立されました



が、梅ヶ崎山の北麓に移築されました。

記念碑が設立されている位置は、当時の高等小学校の正門に当り、当時は高さ3m、径40cmの花崗岩の石柱(2本)で造られた標札でした。

# 下和白地区

## ⑥長楽山 円相寺

**所在地**：和白丘1丁目10-48

**宗派**：浄土宗鎮西派

**由緒**：開祖は博多一行寺住職4世応誉上人、元和元(1615)年に創建されました。初め相ノ浦(現和白5丁目)にありましたが、元禄年間(1688～1704年)に現在地に移転したと伝えられています。本堂入り口の鐘は福岡市指定文化財です。

**大師堂**：弘法大師像、観音像、地藏尊、粕屋北部新四国千人参り、高野山奥之院。

**石像物**：延命地藏等多数、入定塚、句碑。

## ⑦下和白・大神神社

**所在地**：和白丘1丁目18-29

**祭神**：大物主神(大国主命・大黒様)

**由緒**：立花城の守護神として城主の篤い崇敬をうけていた上和白の大神神社が戦火(宗像軍と立花軍)での焼失を恐れ、永禄の年間、下和白に分祀した、といわれています。

**境内社**：貴船神社(多賀雄神、菅原神)・若宮神社(仁徳天皇)・猿田彦神社(猿田彦神)

**ミニ鳥居**：正徳4(1714)年奉納のミニ鳥居がありましたが、平成17年の福岡西方沖地震で柱のみ残して破損、岩石風化のため再建不能となりました。

## ⑧殿様道

將軍が代わると、新將軍就任のお祝いに朝鮮から総勢約500人の一行が、10数隻の船団を組んで「朝鮮通信使」として来日し

ました。江戸まで通過地の各藩が往復の警備・接待を引き受けましたが、その莫大な費用・労力は大きな負担になっていたそうです。



福岡藩は、一行を新宮沖の相ノ島で接待するため、物資・人員を陸路で津屋崎に集め、船で同島に運びました。次の小倉藩に引き継ぐまで、台風などが来れば大変な苦勞があったと記録に残されています。

1643年第5回来訪の際、黒田藩主の黒田忠之は、同島に渡るための近くて便利な新ルートを造りました。この道は「殿様道」と呼ばれ、その一部が今でも和白丘3丁目に残っています。

## ⑨下和白塚原古墳群 山ノ下支群

**所在地**：和白丘3丁目13、和白丘中学裏門内説明板。平野部から15m高い丘陵上に築かれた3基の円墳群。

## ⑩下和白の六地藏

**所在地**：和白丘3丁目2

**由緒**：干拓堤防の守護神、寛政10(1798)年移設



## ⑪相ノ浦香椎神社

**所在地**：和白5丁目29

**祭神**：仲哀天皇・神功皇后

**由緒**：宝永4(1707)年創建。古い記録として「筑前続風土記付録」の中で『拝殿九尺四方、祭祀陰曆9月9日、11月6日の両度。奉仕武内高間。桂ヶ崎(勝ヶ崎)北方村中にあり、宝永年中に勧請せり。相ノ浦八戸産神なり』とあります。毎年11月6日の大祭には香椎宮より神官が出張し、祭典を執行しています。

## ⑫相ノ浦観音堂

**所在地**：和白5丁目27、下和白移転の円相寺跡地。

**本尊**：薬師如来、観音菩薩

**由緒**：粕屋北部新四国千人参り、77番霊場

**石像物**：波切不動尊石像、二代目住職の墓石(改葬済)、円相寺跡石碑があります。

## ⑬神功皇后御繫船遺跡

**所在地**：和白6丁目7

**繫船の碑とゆかりの井戸**

**由緒**：神功皇后遠征の際、香椎の浦から博多湾へ出ると、南風が吹くと予想されたため、勝ヶ崎を回って相の浦に繫船されたとの言い伝えがあります。当地相ノ浦は、和白地区随一の



良港で、博多～裏粕屋を結ぶ船の泊地となっていたので、このような環境から神功皇后磯遊びの船繋ぎには松の木が生えていたそうで、かような伝説も生まれたと考えられます。

**井戸**：井戸ではなく、埋め立てが行われた時、海岸の砂浜の跡(波打ち際)を保有する目的でつくられ、当初は素掘りでしたが転落事故を防ぐ目的で八角形の壁をつくり、蓋をして保存されています。

## ⑭若宮様

**所在地**：和白5丁目21

宝永4(1707)年建設。

**由緒**：牛の守り神。大正時代までは農耕の宝である牛を、和白潟できれいに洗い着飾らせて、この若宮様へお詣りし、牛の健康をお祈りしていました。

## ⑮塩浜観音堂

**所在地**：和白5丁目12

**本尊**：観世音菩薩、薬師如来、弘法大師像、地藏菩薩

**由緒**：一字一石経文を墨書した大量の小石が埋められています。

文化3(1806)年建設、昭和32年移転粕屋北部新四国千人参り、78番霊場。

## ⑯和白駅前大師堂

**所在地**：和白3丁目10

**本尊**：弘法大師、十一面観音菩薩、不動明王

三体の石仏は、大正12(1923)年、姪の浜で造られました。

**由緒**：粕屋北部新四国千人参り第54番霊場

# 塩浜地区

## ■和白干潟

**所在地**：和白4丁目

和白地域は、福岡市が誇る景勝の地。

白砂清松の『海の中道』で外海の玄界灘と接しています。ここには、ウラギク・ハマニンニク・ハママツナ等、めずらしい海浜塩沼池植物や底生生物が豊富で、渡り鳥のルートの位置にあり、絶滅危惧種のクロツラヘラサギ等多くの渡り鳥がやってきます。

このため、国指定の『鳥獣保護区』及び環境省選定の『重要湿地』となっています。

## ①波切不動尊



**所在地**：塩浜3丁目塩浜ポンプ場先海岸、木立の中

慶応2(1866)年、干拓により塩田を拡張して8年経過、製塩も軌道に乗り、塩付が悪い『二の開』は廃止して『一の開』に製塩の主力を注ぎました。そこで、地元の人々の手で『一の開』の堤防上に『波切不動尊』を祭って堤防の安全を祈願しました。(新開築堤上の徒歩道は車の通行不可)

## ②四社神社と和白塩



**所在地**：塩浜1丁目37-16

**祭神**：神功皇后、志賀三神、住吉三神、塩土翁神(しおつちのおきなのかみ：塩の神)

龍王社：(大綿津見神)元禄築堤により開かれた塩田の守護神として、宝永3(1706)年、海浜に『龍王の祠』が造られました。昭和3年、四社神社境内に遷されました。庚申碑：入り口左、宝暦7(1757)年3月の刻記、昭和55年に和白小学校前から移されました。

四社神社がある塩浜の地は「昔、塩釜の浦、塩焼きの浜と称された」と同社の由緒書きに記され、三苦水道といわれる博多湾の奥の出入り口でした。

1500年頃には、個人による「塩」作りが行われていたと推測されています。その後、黒田藩は「塩は米に次ぐ産物である。塩なくて人は生きられない」と製塩に力を入れ、家臣の大野忠右衛門貞勝に命じて元禄16(1703)年には塩田30町歩(30ヘクタール)開き、塩浜地区を創立しました。

神社前付近は「塩取りの浜」と呼ばれ、品質の秀れた「和白塩」を作る筑前屈指の産塩地となりました。しかし、その歴史も今から約百年前に幕を閉じたのです。

# 奈多・雁ノ巣地区

## ①志式神社

**所在地**：奈多宮山 1238



祭神：火明神、火酢芹神、豊玉姫神、十城別神、稚武王、葉山姫神・火難、盗難、難産を免れ家運を開く神として知られる。由緒：神功皇后三韓出兵の折、奈多吹上浜に鎮座される荒ぶる神の御前にて、皇后、戦勝の神楽を奏し給うと伝わり、昔は沖向きに鎮座され、後年この地に遷し奉られました。当初は『三郎天神』として親しまれていました。



聖武天皇の御代、天平 18(746)年、筑紫の観世音寺建立にあたり、御本尊を中華の国より運ぶ折、奈多沖にて急に大時化しげに会い、肥前五嶋の志々岐大明神を船中に勧請し祈願して難を逃れました。その後、航海安全の神『奈多浦志々岐大明神』を建てました。

御陽成天皇の御代、慶長 2(1597)年両社を合祀して『志々岐三郎天神』と称し奉られました。

明治 5(1872)年 11 月の神社号制定により、『志式神社』と改称されました。

**主な建物**：神殿、拝殿、絵馬殿、神輿殿、社務所、志式座

**奈多の志式座**：福岡市指定有形民俗文化財一の鳥居をくぐり右手に建つ常設野舞台。明治 28 年(1895)に粕屋郡久山町の猪野神社境内から移築されたもので、毎年 4 月 1 日の初老賀祭(厄落とし)と 7 月 19 日・20 日の奈多祇園祭で使用されています。建物は間口約 18 m、奥行約 8 m、このうち舞台は間口約 12m、奥行約 5m となっています。移築後、側面の楽屋を拡大し、左手の花道などを新たに設け、茅の屋根を瓦に葺き替えています。舞台前には盛土をして見所(観客席)が作られています。現在このような農村舞台は、市内ではこの「志式座」が残るだけとなっています。

**奈多祇園祭**：7 月 19 日・20 日の祭礼の起こりは、天明 4(1784)年、疫病と飢餓退散の祈願成就のお礼に志式神社に「おどり」(芝居)が奉納され、以後『万年願』と称して、一度も欠くことなく続けられてきたと伝えられています。

**早魚(はやま)行事**：福岡県指定無形民俗文化財



11 月 19 日・20 日の秋大祭 御宮日祭(奈多おくんち)に奉納される『天神尋ね』『献魚包丁式』『鱈(ひれ)舞』の一連の神事を『早魚(はやま)』と呼んでいます。

## ②西福禅寺



**所在地**：奈多2丁目32-3

**宗派**：臨済宗東福寺派

**由緒**：弘安3(1280)年「聖一国師」の開山。寛文3(1660)年「了印孚公禅師」中興の祖となり堂の建物を再建。大正2(1913)年、奈多の大火に類焼。大正9(1920)年現在地に移して再興。昭和50(1975)年『開山700年大遠忌』記念事業として本堂・庫裡を増改築、鐘楼を新築、約2トンの大梵鐘を新鑄。

**境内物**：観音堂、鐘楼、石仏像群八十八体、

## ③護宝寺

**所在地**：奈多2丁目4-24

**宗派**：天台宗

**由緒**：天正9(1571)年、国東から開祖「今林妙仙」がこの地に移り住み、天台宗を広めました。現在は廃寺となり碑のみが残ります。



## ④奈多地蔵堂

**所在地**：奈多2丁目3

**本尊**：地藏菩薩、弘法大師、無縁佛

**由緒**：粕屋北部新四国千人参り、第79番霊場



## ■雁ノ巣飛行場

昭和11(1936)年、雁の巣に東洋一の国際空港・福岡第一飛行場が竣工し、国内はもとより、中国大陸や朝鮮半島、台湾、東南アジア方面へと銀翼が飛び立ち、空の時



代の幕開けとなりました。

工事は、人手に頼る作業で日給90銭、天気の良い日は割増が出ていたそうです。開港3

年後の昭和14年、狭くなったことから拡張工事が行われ、幅80m、長さ800mの2本の滑走路が交差した空港となりました。戦後は米軍に接收され「キャンプ・ブレディ」と呼ばれていました。現在は、雁の巣レクリエーションセンターとして多くの市民のスポーツを楽しむ姿が見られます。

# 塩浜地区



# 奈多地区





綿津見神社（三苦）境内の大日堂に祀られる「伝大日如来像」

## 和白周辺歴史探訪・交通機関と最寄りの駅名

西鉄貝塚線 和白駅・三苦駅  
JR 鹿児島本線 福工大前駅  
JR 香椎線 和白駅・奈多駅・雁ノ巣駅・西戸崎駅

## お問い合わせ

福岡市東区役所総務部 生涯学習推進課

☎ 812-8653 福岡市東区箱崎 2 丁目 5 4 - 1

☎ 092-645-1144 FAX 092-651-5097

東区歴史ガイドボランティア連絡会「歩・歩・歩（さんぽ）会」

さんぽ会ホームページ：<http://e-sanpokai.rojo.jp/>

《出典》「ふる里のむかし わじろ」 2006 和白郷土史研究編